Antiques *Midi

Vol.17
FREE PAPER
SUMMER 2023

フランス、イギリスで見つけたアンティーク家具とインテリアアイテムを扱うアンティークショップのフリーペーパー第十七号

アンティークスミディ
〒562-0035 大阪府箕面市船場東 1-9-6 3F
Tel / Fax 072-728-4777
Open 12:00 ～ 19:00
Hp → http://www.antiques-midi.com
Mail → info@antiques-midi.com
Instagram → @antiquesmidi

8 ディゴワン
Digoin

フランス・ブルゴーニュ地方に位置する小さな街ディゴワン。19世紀頃から陶器産業が栄えており、ディゴワンといえば、カフェオレボウルが特に有名です。さらにディゴワンの名を一躍有名にしたのは、やはり1879年のサルグミンヌとの合併。Digoin & Sarreguminesとして、最盛期を迎えます。以後も、カフェオレボウルの生産を始め、様々な陶器を世に送り出しました。

Digoin & Sarreguminesとなった後の刻印。1875~1900年頃に使われていました。

1900年頃のスタンプ。合併後しばらくは、Digoin、Sarreguemines、Digoin & Sarreguminesの3つの刻印が使われていましたが、その後会社名をDigoin & Sarreguminesに変更し、1881年から総称をFaienceries de Sarreguemines、Digoin et Vitry-le-Francois と呼ぶようになったそう。

1918年頃のスタンプ。こちらはドイツ領となったU&C Sarreguminesのもの。

人気の花リムシリーズによく見られるスタンプ。こちらは1920~1950年代頃のもの。

9 サルグミンヌ
Sarreguemines

1784年、ドイツとの国境に接する街サルグミンヌで創業した窯。質の良い陶磁器の生産に励み、貴族から一般市民まで広く愛される大きな会社へと成長。かのナポレオンも御用達だったと言われています。ところが1870年代、戦争によりサルグミンヌの街がドイツ領となったことで、会社を2つに分割し、ひとつをブルゴーニュ地方のディゴワンに窯を移すことに。元々陶器の生産が盛んであったディゴワンとは合併する形となり、Digoin & Sarreguminesとして1978年まで多くの食器を作り続けました。一方、ドイツ領になった元々のサルグミンヌ窯も、Utzschneider & Cie（U&C Sarreguemines）と名前を変え、発展を遂げていきました。1918年、第一次大戦のドイツの敗戦によりサルグミンヌは再びフランス領に戻りますが、経営不振や時代の波に逆らえず、リュネヴィル・バドンヴィレ・サンクレマングループに買収され、1978年に食器の生産を終えました。

10 リュネヴィル
Luneville

フランスの北東部、ロレーヌ地方に位置するリュネヴィル。1728年ジャック・シャンブレット（Jacques Chambrette）によって陶器会社が創業されました。当初はロレーヌの領主や貴族のための高級な食器を生産していて、1749年にはロレーヌ公の領主ご用達に。1758年にはサン＝クレマン（Saint-Clément）に第二の工場を設立しました。2つの窯を併せたリュネヴィル・サンクレマンの名で知られるようになりましたが、創業者のシャンブレットが亡くなった後、このふたつの工場は分裂。リュネヴィルは、ドイツ人のケラー（Keller）と友人ゲラン（Guerin）が会社を買い取り、経営が引き継がれました。この頃から、K&G（Lunéville　Keller & Guerin）のバックスタンプが使われるようになります。K&G時代になってからは陶器の製造が工業化され、貴族の為の陶器から、中流階級の生活にも浸透。一方サンクレマンは、より一層の高級志向に向かいました。一度は分裂したふたつの窯ですが、1892年に改めて、Keller & Guérin社のもと一つになります。1922年にバドンヴィレやサルグミンヌと合併を経て、1981年にリュネヴィル窯は閉鎖しました。

シリーズ名がそれぞれ異なりますが、同じデザインのスタンプで1875年頃のもの。

11 バドンヴィレ
Badonviller

名窯が集うロレーヌ地方にあるバドンヴィレで栄えたバドンヴィレ窯。元々は、1820年にフェナル一家がペクソンヌで窯を始めたところから始まり、1836年からニコラ・フェナルが正式にオーナーとなりました。ニコラの死後は、息子や甥たちが経営を引き継ぎこの時代には「FF」（Fenal Frères）の刻印が使われていました。その後は、甥であるテオフィル・フェナルが分離独立する形で、1898年バドンヴィレに工場を設立。これがバドンヴィレの始まりです。この頃マークは「TF」（Theophile Fenal）となり、工場も発展していきました。テオフィル亡き後は、息子であるエドワードが引き継ぎさらに拡大。バドンヴィレは最盛期に。1920年にエドワードはリュネヴィル・サンクレマン窯の指揮もするようになり、刻印に「KG」が刻まれます。のちにバドンヴィレは、リュネヴィル・サンクレマン窯と合併し、刻印はBadonvillerに統一されるように。その後サルグミンヌとの合併を経て、1990年サンクレマン窯だけを残し、その長い歴史に幕を下ろしました。

刻印のFTは、テオフィル・フェナル経営時代の1898年から1905年の製造です。理由は不明ですが、FTと書いてあるもの、TFと書いてあるもの、2種類が存在するようです。

※フランスの窯の歴史については、サイトや文献などを参考に*Midi独自にまとめたものです。諸説あるものもあり、参考程度にお読みいただければ幸いです。

How to Coordinate With French Tableware

フランス陶磁器の歴史を少し知ると、これからの食器選びがより楽しくなりますね。お気に入りの食器に出会えたら、次は実際にコーディネートしてみましょう。特にフランス料理は、テーブルマナーが厳格なイメージがありますが、ホームパーティーでは、あまり形式に捉われすぎず、カジュアルに楽しむのがおすすめです。フランスならではの食器、スーピエールやソーシエール、ラヴィエなども本来の使い方でなくても大丈夫。

St.Amand
Dinner Plate 25.5cm

Digoin & Sarreguemines
Moutardier

Apéro Dinatoire

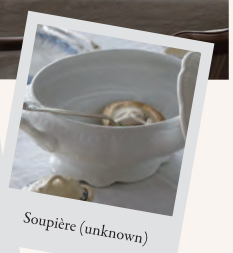
フランスのカジュアルなホームパーティー、アペロ・ディナトワール編

ディナーより気軽に、アペロ（お酒＋ちょっとしたおつまみ）よりしっかりめに、
晩ごはん代わりにもなる食事とお酒を楽しむスタイルをアペロ・ディナトワールと呼ぶのだそう。
前菜やおつまみの盛り合わせをたくさんテーブルに並べ、お酒を飲みながら好きなものをつまんで
わいわいとおしゃべりを楽しみます。

そんな、カジュアルだけど崩しすぎない、ディナーテーブルに選んだのは
St.Amand Regenceシリーズのディナープレート（25.5cm）
気軽なアペロは、手や爪楊枝でいただけるものも多いようですが、
ナイフ＆フォークの基本のセットだけ並べて。
カトラリーは、ORBRILLE（オルブリーユ）のもの。
それからフランスの食卓に欠かせないのがワイン。もちろんワイングラスも忘れずに。

フランスのスーピエールは、本来スープを入れて使うものですが、
サラダを入れたり、切り分けたパンなどを入れるのもおすすめです。
フランスのホームパーティーにはお花が必須アイテムなので
スーピエールをフラワーベース代わりにアレンジするのも素敵です。
食器の窯やブランドはバラバラでも色味や雰囲気を揃えるとコーディネートしやすいですね。

Christofle
Wine Glass



Soupière (unknown)

Café et Thé

お庭やテラスで楽しむカフェタイム編

Sarreguminesのデザートプレート（19cm）を使いました。
現在も人気の高い花リムのデザインで、サルグミンヌのものは、
少し黄色みがかったクリーム色のような温かな色味が特徴的です。
サルグミンヌとゆかりが深いディゴワンのカフェオレボウルを合わせて。

Digoin
Cafe au lait Bowl

Rocaille Lavier

カフェオレボウルとは、取っ手のないお椀型の器のこと。
フランスでは朝食時にスープやカフェオレにパンを浸して食べる食文化があったそうで
パンを浸しやすいよう口の広いこの形状になったのではと言われています。
このカフェオレボウル生産の圧倒的なシェアを誇るのがディゴワン窯。
ステンシルで模様を描いていたり、少しポップな色使いであったり
比較的カジュアルで可愛いらしいデザインのものが多いのも特徴的。

本来は前菜用プレートのラヴィエですが、実はスイーツとも相性抜群。
菱形やオーバル型で、植物モチーフなどのデザインが入ったものが多いですが
シェルモチーフも多く見かけます。個性的な形で、テーブルコーディネートのアクセントに。

Sarreguemines
Dessert Plate 19cm

※当店で取り扱いのアンティーク食器は、基本的に観賞用として仕入れ・販売を行なっているものになります。古いものである点をご理解いただき、実用でのご使用はお客様個人のご判断でお願いいたします。

Stories of French Pottery

17世紀ごろに東洋からもたらされ、独自の発展を遂げたフランスの陶磁器。陶磁器の生産に欠かせない素材（カオリン）の発見も手伝って、18世紀後半頃からフランス各地で生産されるようになりました。代表的なものは、リモージュ焼やジアン焼、セーブル焼きなど、日本でも有田焼、美濃焼、益子焼などがあるように、フランスでも地方や街の名前が付けられていることがほとんどです。例えばリモージュ焼といっても、リモージュの街近郊で作られる陶磁器の総称であって、リモージュ焼きの中にも、たくさんの窯や陶磁器メーカーが存在します。また、クレイユとモントローのように、別の陶磁器会社が合併して、クレイユエモントローと名前を変えることも。その他の窯も同様に、合併、吸収、分割、工場の移転などを繰り返し、経営も代々受け継がれ、フランス革命や戦争など、時代に翻弄されながらも発展を続けてきました。そんな、とても複雑で奥深いフランス陶磁器の世界ですが、食器の裏側にあるバックスタンプを見ることでどんな土地で、どんな会社が作っていたのか、いつ頃作られたものか、おおよそ特定することができます。今回はミディで取り扱いの多いものを中心に、バックスタンプを元に、作られた街や窯、歴史やストーリーを探ってみましょう。

French Pottery Map

1 サンタマン Saint-Amand-Les-Eaux

フランス北部・ベルギーにもほど近い町サンタマン・レゾー（Saint-Amand-les-Eaux）で1705年に創業した陶器会社。長い歴史の中で吸収や合併を繰り返し、工場の移転や閉鎖、新設も多く、その歴史はとても複雑です。工場はサンタマン・レゾー以外にも、フランス北部にいくつか点在しており、ヴァランシエンヌ、オルシ、ヴァンディニー・アマージュなど様々な土地にありましたが、元々の発祥の地であったサンタマンの名を取り、総称してサンタマン陶器と呼ばれています。そんな背景もあり、サンタマンのバックスタンプは工場や年代によりデザインも様々。オルシの工場では風車、セラノーの工場では白鳥がシンボルになっていたりとそれぞれの工場や窯によって特色が見られます。

Wandignies-Hamage

こちらはSt Amand et Hamage Nordと記され1896年に設立されたWandignies-Hamage（ヴァンディニー・アマージュ）の工場で作られたもの。製造年代は1896年～1952年です。

こちらも1896～1952年頃に作られた製品に多く用いられたデザイン。城壁のような王冠の下に、サンタマンの紋章である2つのフルールドリスの間に剣が描かれています。

St. Amand-les-Eaux

デザインによっては製造年代をより明確に特定できることも。こちらは1932年頃に作られたもののよう。

Valenciennes

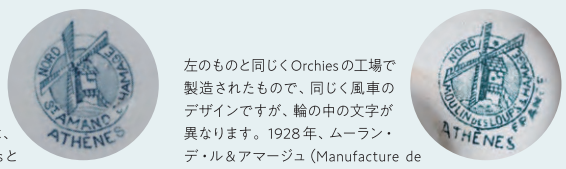
1900年にヴァランシエンヌに設立されたSt.Amand Societe Amandinoise de Faiencerie。L'amandinoise（ラマンディノワーズ）とはこの地方に住む女性のことをそう呼ぶのだそう。

Ceranord

1908年にはCeranord（セラノー）の工場が設立され、そこで1962年までに製造されたものには、白鳥のバックスタンプが多く用いられています。こちらはおそらく1908～1932年ごろのもののようです。

「Les Grands Etablissements Céramiques」は晩期の頃の社名ですので、比較的若い年代（1950～60年代）に製造されたもののようです。

Orchies



風車のデザインは、1923年にOrchiesとHamageの工場が合併し社名がサンタマン・オルシ・アマージュ（Faïence et Porcelaine St Amand-Orchies-Hamage）となった頃のもの。

左のものと同じくOrchiesの工場で製造されたもので、同じく風車のデザインですが、輪の中の文字が異なります。1928年、ムーラン・デ・ル＆アマージュ（Manufacture de Moulin des Loups-Hamage）、1944年にはムーランデルー（Les Manufacture de Faïence du Moulin des Loups）と社名が変更されたので、その記載のあるものは早くとも1928年以降に製造されたものと推測されます。

2 モントロー Montereau

パリから南東へ約140kmほど離れた小さな街で、1700年代前半に開窯し古い歴史を持つモントロー。1840年にクレイユと合併しクレイユエモントローに。さらに1920年にショワジールロワと合併し、HBCMとなりました。シンプルなアーチ型のロゴに、どんな文字が付随しているかによって、おおよそ年代がわかります。アーチ型ではなく、真っ直ぐなロゴのものは19世紀前半と大変古いものです。

刻印が薄いので定かではありませんが半月型のロゴの中に、アルファベットか数字が書かれており、おそらく19世紀後半のもの。

アーチ型の文字のみは1900年代以降のもの。

「FRANCE」の文字が入るようになったのは20世紀になってフランス国外への輸出を開始してからのようです。

3 クレイユ Cleil

パリ北部に位置し、1796年に開窯したクレイユ。1840年にモントローと合併し、クレイユエモントローに。さらに1920年にはショワジー・ル・ロワと合併し、HBCM（Hyppolyte-Boulanger Creil Montereau）となりました。「Creil」のみのシンプルなバックスタンプの入ったものは19世紀前半に製造されたとても古いものといえます。

デザインは同じですが、左は合併当時の経営者のイニシャルである「LM＆Cie（Lebeuf Milliet Bénitier＆Co）」の文字が入っています。"LM＆Cie"の刻印は、1840～1876年頃の間に使われていたもの。Creil et Montereau が合併時に使っていたもっとも古い刻印です。右は1884～1920年ごろに使用されていたもの。

4 ショワジー・ル・ロワ Choisy le Roi

HB & Cie（Hyppolyte-Boulenger & Cie）は、1804年にパリ近郊ショワジー・ル・ロア（Choisy le roi）で創業した窯元。パイヤール3兄弟によって創業され、経営に参加したイポリット・ブーランジェが1863年に工場のディレクターとなった後、1878年に社名をH・ブーランジェ（H・Boulenger & Cie）に変更。1920年にクレイユエモントローと合併し、HBCM（Hyppolyte-Boulanger Creil Montereau）となり、その後はモントローの地で1955年まで歴史が続きました。

1920年以降、HBCMになってからのもの

H・Boulenger & Cie時代のシンボリックなデザイン。1878年～1920年までのものです。

シンプルロゴも同じく1878年～1920年までのデザイン

5 ジアン Gien

1821年パリの南にあるロワール河岸の豊かな自然に恵まれた町ジアンに設立された陶器会社。現在も陶磁器の生産を続けており、その歴史は200年程になります。長い歴史の中で、他国のテイストも積極的に取り入れ、ジアンの食器はとてもバラエティ豊か。淡黄色の土の上に錫釉をかけた少し温かみのある雰囲気のファイアンス焼の工房としても有名です。ジアンのバックスタンプには、3つの塔からなるお城のようなデザインが多く使われています。おそらく街のシンボル、ジアン城でしょうか？ 現在のロゴマークも、このお城がモチーフになっています。

1886年から1938年頃のもの。同じマークですが下部のデザイン（TERRE DE FERの表記とシリーズ名）が少し異なります。TERRE DE FER（テールドフェール）は19世紀後半ごろより量産されるようになった半陶半磁器。より白く、より頑丈な素材でジアンに限らず、サンタマンやショワジールロワ、サルグミンヌなど様々な窯でテールドフェールのお皿が作られました。

1875年　1960～1971年

6 リモージュ Limoges

フランス中部に位置し、1771年から現在まで生産を続けているフランスを代表する名窯のひとつ。リモージュ焼きは白くキメ細やかな磁器で、金の縁取りが多用されていることも特徴です。素焼きに絵付けをして焼くのではなく、白い生地に絵付けしてからさらに焼き付け、白さを際立たせるという手法で、リモージュでは19世紀後半からこの手法が行われているそう。リモージュ焼きのブランドは多数あり、フランス王室御用達のブランド、ロワイヤル・リモージュをはじめ、アビランド、ベルナルドなども有名です。そのためLimogesのバックスタンプの種類は無数に存在し、記載されているメーカー名もさまざまです。

ロワイヤル・リモージュ　union limousine　ジロー　アビランド

7 ボルドー Bordeaux

ワインの産地として有名なフランス南西部・大西洋にも近い町ボルドーにて開窯した通称ボルドー窯。1835年にイギリス人のDavid Johnstonによって創業。1845年、David Johnstonの後を継いだJule Vieillardにより、Jules Vieillard et Cie（ジュール・ヴィエイヤール・エ・シー）と社名を改め発展していきましたが、後継者に恵まれず、1895年に閉窯。わずか60年ほどの短い期間で幕を閉じた窯であるため、現存するものは比較的希少価値が高いと言えます。

詳しい年代は不明ですがすべてJules Vieillard et Cie時代のものなので、1845～1895年までのもの。

J. V.＆CieやJ.V.B（Jules Vieillard Bordeaux）と呼ばれることも。

Recommend

Cup Board

シェルや植物モチーフが豊かに施され、豪華な佇まいのアンティークカップボード。上部の棚は 3 面がガラス、背面と底にはミラーがあしらわれ、光をたっぷり取り込み、まるでショーケースのよう。圧倒的な存在感で空間の主役になる家具です。
[France 1920's]

Basket

筒型になったフォルムが、すっきりとシンプルで可愛らしいナチュラルバスケット。自然素材ならではの温かみを感じる風合いでしっかりと編まれ強度も十分。あえて中身を見せたりすっぽりと隠して収納したり、用途に応じて幅広くお使いいただけます。
[France]

Bureau Bookcase

すらりと背が高く、縦のラインが美しいビューローブックケース。本棚とデスクが一体化した作りで、収納をたっぷりと備え、天板は引き出して広く使うことが可能。とても機能性の高いアイテムです。落ち着いたクラシカルな雰囲気も魅力。
[France 19 世紀後半]

Flower Vase

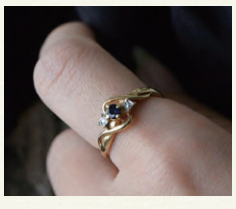
マットなブラックペイントがシックなフラワーベース。大きく広がった持ち手とくびれが印象的で、シルエットまで美しい姿。時を重ねた風合いも相まって、どこか厳かな佇まいです。サイズ感は比較的小さめで、ご家庭でも取り入れやすい大きさです。
[France]

Vintage Jewelry from England

Antiques *Midi では
イギリスのヴィンテージジュエリーの
取り扱いをはじめました。

アンティーク家具と同様に、
ヴィンテージジュエリーも
そのほとんどが一点もので、
多彩で美しい天然石を贅沢に使用し
その時代を象徴するような、個性豊かなデザイン。
オーナーが現地へ赴き、実際に目で見て
買い付けを行っています。

*Midi では特にリングを豊富に取り揃えており、
使用している石の種類はダイヤモンド、サファイア、
オパール、ガーネット、トパーズ、パール、エメラルド
ルビー、アメジスト、タンザナイトなど様々です。

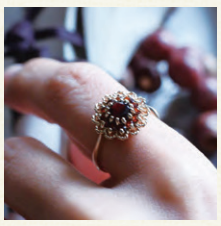


ダイヤモンド、
サファイア、
オパールなどが
特に人気です。

18K オパールリング
〈ロンドン製 1965〜66年〉

9K モルガナイトリング
〈バーミンガム製〉

18K ダイヤモンド ×
サファイアリング



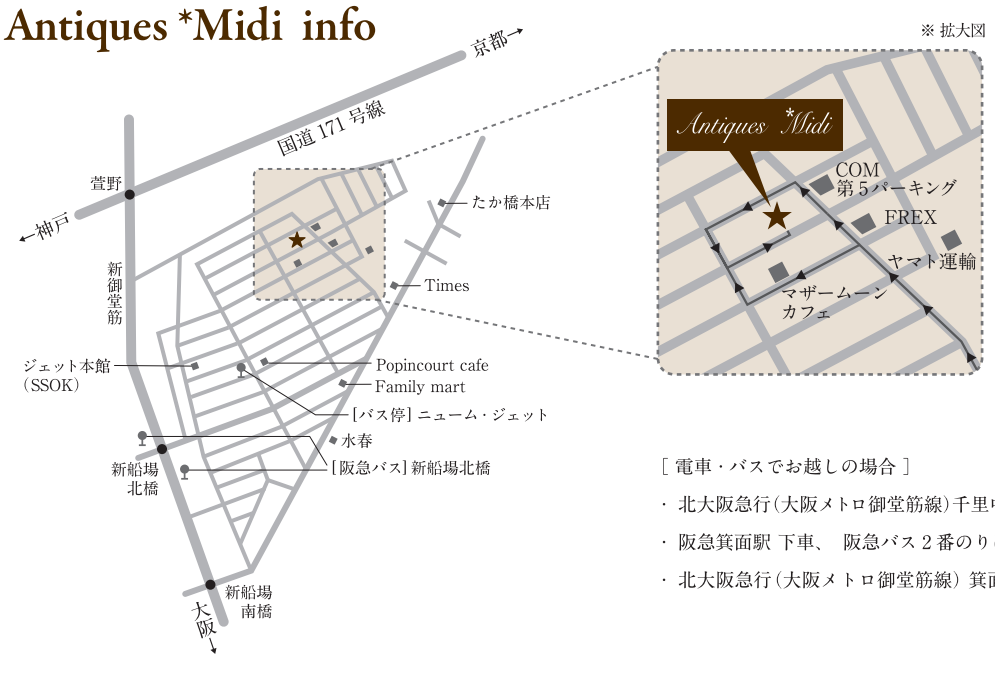
9K ガーネットリング
〈ロンドン製 1975 年〉

ジュエリーに使用されるゴールドの純度はカラット (K) で表されますが、
イギリスのヴィンテージジュエリーは、あまり聞きなれない 9K ゴールドのものが多く存在します。
一般的にジュエリーに多く使用されている 18K(18 金) などと比べ、
金の純度は低いですが他の金属が多く含まれるため硬さがあり
摩耗が少なく、色味も落ち着いた印象のゴールドです。
またイギリスには 12K,15K という金位も存在し、
1854 年〜1932 年の一定期間のみに生産されたもので
とても希少価値の高いものだといえます。

金位や年代、作られた場所は刻印によって
ある程度判別することができ、食器のバックスタンプと同様に、
そのルーツを紐解く重要な鍵となっています。

ヴィンテージジュエリーの世界もまた奥深く
古いものでありながら、どこか新鮮で、
過去から現代へ、受け継がれていくべき
たくさんの魅力で溢れています。

Antiques *Midi info



〒562-0035
大阪府箕面市船場東 1-9-6 3F
Tel / Fax 072-728-4777
Open 12:00 〜 19:00
定休日なし (年末年始を除く)
駐車場有り
http://www.antiques-midi.com

[電車・バスでお越しの場合]

- 北大阪急行 (大阪メトロ御堂筋線) 千里中央駅 下車、 阪急バス 12 番のりばから「ニューム・ジェット」直行バスにご乗車下さい。
- 阪急箕面駅 下車、 阪急バス 2 番のりばから 19・20 系統千里中央行「新船場北橋」停留所下車
- 北大阪急行 (大阪メトロ御堂筋線) 箕面船場阪大前駅 (2023 年度末開業予定) から徒歩約 10 分